

【典礼質疑応答集】

2024年9月23日札幌地区典礼担当者研修会（事務局に事前に問い合わせのあった質問）

札幌地区典礼委員会編

用語、文言に関する質問

1	質問	ミサという言葉にはどのような意味があるのでしょうか。
	説明	<p>「ミサ」という言葉はラテン語の <i>missa</i> に由来し、もともとは「解散」という意味だったと言われています。それが時代とともに、ローマ・カトリック教会の礼拝式を意味するようになりました。</p> <p>司式司祭が会衆に向かってラテン語で「<i>Ite, missa est.</i>（イテ・ミサ・エスト）」と言って礼拝式の終了を告げていたことから、広く使われるようになったと言われています。このラテン語を直訳すると「行きなさい、礼拝式は終わります。」となります。「イテ・ミサ・エスト」というミサの終わりのことばが、「行きましょう。主の平和のうちに」と日本語になることによって、私たちはミサの中で聞いた聖書のことばと、「これはあなたがたのために渡されるわたしの体である」と示されたキリストの聖体に養われて、私たちが生きるそれぞれの日本の社会の現実の中に、主の平和をもたらすために、イエス・キリストの弟子達として派遣されて行くことを意識するようになったはずで</p>
2	質問	言葉の典礼で第一朗読と第二朗読の後に朗読者が「神のみことば」と唱えますが、福音朗読で司祭は「主のみことば」と唱えます。言葉が異なるのはどうしてですか。
	説明	<p>ラテン語ではどちらも同じ「<i>Verbum Domini</i>」ですが、各国語に翻訳する際にはふさわしい言葉にすることを各国の司教団に任されています。</p> <p>たとえば日本では「神のみことば」と「主のみことば」ですが、米国では「<i>The word of the Lord</i>」と「<i>The Gospel of the Lord</i>」となっています。</p>
3	質問	祝福と祝別は何が違うのでしょうか。
	説明	<p>ラテン語で「祝福」は「<i>benedictio</i>」、「祝別」は「<i>consecratio</i>」で、違う言葉です。「祝別」は「聖別」とも言います。また、古い文書では「<i>benedictio</i>」の訳語として「祝別」を用いているものもあるので注意が必要です。</p> <p>「祝別」の原語の「<i>consecratio</i>」には奉献するという意味もあり、単に祝福するのではなく、別のものにするというニュアンスを含みます。</p> <p>実例としては、「祝福」は人・建物・教会付属の品や信心用具などにされ、「祝別」はミサの中での聖変化・教会堂の献堂・司教の叙階・奉献生活の会の会員の奉献などにされます。昔は祝福行為に関して、コンセクラティオ（「聖別」または「祝別」）の用語が多く使われていたため、ものや人の在り方の変化に関心が向けられてきたきらいがありますが、第2バチカン公会議後の典礼では祝福の本質である、神からの恩恵と神に対する賛美の関係を明確に表し、ものに関する場合でもつねにそれを使う人を主眼とするように刷新されました。ですから祝福を求める祈りは、物ではなく人に向けられています。</p>
4	質問	ミサの中で「いけにえ」という言葉があるが、日本人にはなじみがなく言葉の持つ意味が強く感じる。「ささげもの」という言葉との違いはあるのか。
	説明	<p>「祈りへの招き」において、司祭が「皆さん、ともにささげるこのいけにえを、～」、会衆が「あなたの手をとおしておささげするいけにえを、～」とあります。レビ記には5つの捧げ物として「焼き尽くす献げ物」「穀物の献げ物」「和解の献げ物」「贖罪の捧げ物」「賠償の献げ物」の記載がありますが、</p>

		<p>すべてが動物のいけにえではありません。穀物の捧げ物は小麦粉です。</p> <p>なお、ローマ 12・1 に「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」とあります。</p>
5	質問	<p>集会祭儀で先唱者が「開祭の歌」「閉祭の歌」という人がいるが、ミサでは「入祭」「閉祭」と唱える人がいるので違和感がある。問題はないか。</p>
	説明	<p>問題はありませんが、共同体の皆さんで話し合っって違和感が生じない方法を探っては如何でしょうか。</p>
6	質問	<p>御ミサの聖体拝領時、洗礼を受けてない人への案内で「洗礼を受けていない方も司祭の祝福に与れますので司祭の前で軽く頭を下げてください」とアナウンスしてきたが良いのでしょうか。</p>
	説明	<p>問題ありません、正しい説明です。</p> <p>「カトリックの洗礼を受けていない方も司祭の祝福に与れますので、司祭の前で両腕を交差させて軽く頭を下げてください」と説明している小教区もあります。</p>
7	質問	<p>ミサで司祭との応唱が「また 司祭とともに」が「また あなたとともに」に変更されました。違和感があるとの意見から「また あなたとともに」の言葉が採用されましたが「また あなたとともに」の言葉にも違和感があるのはなぜでしょう。</p>
	説明	<p>違和感は日常生活で使わないからです。早く慣れるようにしましょう。ラテン語テキストでは「et cum spiritu tuo : また、あなたの霊とともに」で、英語版は「And with your spirit. (また、あなたの霊とともに)」です。</p> <p>「霊」が馴染まないという意見があり「また、あなたとともに」に落ち着きました。</p>
8	質問	<p>いつくしみの賛歌には先唱があります。栄光の賛歌、感謝の賛歌は一同となっていますが、どうしてですか。</p>
	説明	<p>「いつくしみの賛歌 (キリエ)」は、信者が主に呼びかけて、そのいつくしみを願う歌ですので、通常その役割をもっている聖歌隊か先唱者と会衆とによって行われます。(「ローマ・ミサ典礼書の総則」51 参照)</p> <p>「栄光の賛歌 (グロリア)」は、司祭あるいは適当であれば先唱者が聖歌隊が歌い始めます。(同 53 参照)</p> <p>「感謝の賛歌 (サンクトゥス)」は、全会衆が司祭とともに歌います。(同 79b 参照) 先唱者が聖歌隊が歌い始めることも、一同で歌い始めることもできます。</p> <p>「平和の賛歌 (アニュス・デイ)」は、聖歌隊か先唱者が歌い始めてもよいですが、(同 83 参照) その後は一同で歌いましょう。</p>
9	質問	<p>年間ってなんですかと訊ねられたことがあります。「年間予定表」のような日常用語とは異なる使われ方です。『教会暦と朗読聖書』に(カトリック中央協議会) 引用されている「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」によって説明できると気づきました。「年間」とはカトリック教会で日本語から 翻訳されたときに採用されたのですか。</p>
	説明	<p>「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」に以下の記載があります。</p> <p>43 固有な特質を備えた諸節を除く場合、キリストの神秘の種々の面を取り立てて祝わない週間が一年の周期の中で、33 ないし、34 週残ることとなる。こういう週間、とりわけ主日は、むしろキリストの神秘全体を追憶するものである。この期間は「年間」という名で呼ぶ。</p>

--	--	--

入祭唱・拝領唱・答唱詩篇に関する質問

10	質問	所属教会では主日ミサで『聖書と典礼』（オリエンズ宗教研究所）を使い、脚注に入祭唱と拝領唱があります。また週日ミサで使う『毎日のミサ』（カトリック中央協議会）に、入祭唱と拝領唱が載っています。これらは印刷物が届いて初めて知ります。事前に一年分を知りたいと思っています。
	説明	『毎日のミサの友』やミサ典礼書に載っています。それ以外にまとめたものは存じません。
11	質問	答唱詩編の典礼暦における一年間の一覧表は、毎年の『教会暦と朗読聖書』以外に公表されていますか？『朗読聖書の緒言』（カトリック中央協議会 1998 年改定版インターネット公開）に答唱詩篇の一覧表を見つけられませんか。『典礼聖歌』の後ろに主日についての索引はありますが週日については載っていません。復活徹夜祭の答唱詩編について『典礼聖歌』392 ページに洗礼式の有無と第五朗読有無との関連が記述されていますが、必要な時には気づくことができませんでした。
	説明	『毎日のミサの友』に載っています。それ以外にまとめたものは存じません。
12	質問	答唱詩編の最初に答唱句を会衆全員で歌います。詩編に対する答唱という意味ならば最初に答唱を歌うことが理解できませんでした。ところが第一朗読に対する答えとしての「答唱」であるとの解説を読みました。答唱詩編とは答唱としての詩編という意味ですか？つまり答唱詩編として四文字で表されるものですか？あるいは、『ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版 2004 年）』61 にあるように答唱と詩編という二つの部分からなるものですか？
	説明	第一朗読に関連した詩編に対する答唱です。昔は文字を読むことができない人のために、まず答唱を聞いて覚えてもらい一度みんなで歌って、詩編唱者が詩編を唱えて、会衆が答唱を歌えるようにしていました。
13	質問	『ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版 2004 年）』で、信徒による「答唱」（答唱詩編、奉納で祈りへの招きに対し「神の栄光と賛美のため、また〜）」、「応唱」（アーメン、記念唱に対して）、「呼称」、（共同祈願、アニュス・デイ）と、使い分けされています。答唱、応唱、呼唱はどのような基準で使い分けられていますか？
	説明	ミサ典礼書の総則の方でどのように直しているか確認が必要です。暫定版の翻訳から変更されているかもしれません。

ミサにおける拝領・動作・所作・朗読に関する質問

14	質問	なぜ祭壇にロウソクをおくのですか？
	説明	<p>ロウソクの灯は私たちの喜びのしるしだからです。ミサだけでなく、さまざまな典礼においてロウソクを灯すように定められています。</p> <p>ミサが、キリストの最後の晩餐を再現する、主の食卓のかたどりとしての側面を持つことはよく知られています。祭壇には必ずテーブルクロスがかけられそしてロウソクが置かれる。食卓としてはごく自然なことですので、特に子供たちに説明するときによく言われます。ただ、これではミサ以外の典礼の場合説明しにくくなります。</p> <p>「ローマ・ミサ典礼書の総則」によれば、ロウソクは「すべての典礼行為の際に必要」であり、それは「崇敬と祝いの喜びを表すため」と説明されています。また、ロウソクは必ずしも祭壇上になければいけないとは限りません。祭壇近くのロウソク台であっても構わないし、和室の場合などは床の間や違</p>

		<p>い棚に置くことも許されています。ただし祭壇からあまり遠くならない程度です。要は、今から祭壇を中心として行われる典礼に対して、私たちが特別な思いを込めて注目し、喜びを共にする、そのしるしとして輝く灯火を置く、という事です。</p> <p>なお、歴史的事実として祭壇にローソクが置かれるようになったのは、十二世紀ごろの中世ヨーロッパにおいてのことであり、ラテン語を解しない一般信徒に対して、ミサの内容をなんとか理解させようとさまざまな工夫を凝らしたその一環だったということです。</p>
15	質問	<p>聖変化の時に跪く方と跪かない方がいます、跪いたほうが崇敬を表せると思いますが、若い信徒から質問を受けたときどのように返答すればよいですか？</p>
	説明	<p>2015年11月29日から実施された、『新しい「ローマ・ミサ典書総則」に基づく変更箇所』によれば日本ではミサ中の動作は「立つ」と「座る」であり、ミサのときの一一致のしるしとして、「立つ」「座る」の2つの姿勢を取るように日本の司教団から指示がありました。祈りの姿勢としてひざまずくのは個人の自由ですが、ミサのときにはみんな同じ姿勢を取りましょう、ということです。</p>
16	質問	<p>入祭と退堂時に年長者から「司祭の方を向いて礼をしなさい」と指導されました前を向いたままの方もいます。どうすればよいのでしょうか。</p>
	説明	<p>聖職者への畏怖は、念も表現も人それぞれですので、ご自分の念に従えば宜しいでしょう。多少大きさになりますが自由意志として括れます。</p>
17	質問	<p>新しいミサ式次第の中に、一同とある時の入り方が難しく良くわかりません。司祭の招きを統一できないのでしょうか？</p>
	説明	<p>司祭の招きの後に一同で答える所はありません。一同で答えるのは回心の祈り一、栄光の賛歌、朗読後（神に感謝。キリストに賛美）、信仰宣言、感謝の賛歌、拝領前の信仰告白です。</p>
18	質問	<p>聖体拝領時、カトリック以外で洗礼を受けている方に、どう説明をしたらよいのでしょうか？カトリック以外の一部の教会では、未信者の方でもパンを頂けるそうです。なぜカトリックの洗礼を受けた人しか聖体拝領ができないのか？</p>
	説明	<p>カトリックの秘跡を受けることができるのはカトリックの洗礼を受けた人だけです。「聖体を拝領するためには、カトリック教会に完全に結ばれていなければなりません。」（カトリック教会のカテキズム要約：カトリック中央協議会発行から）</p> <p>聖体は、洗礼によって新しく生まれた神の子の永遠の命を保ち、育て、完成に導く糧だからです。また聖体拝領前1時間は、水以外の飲食は慎むことになっています。聖体拝領は左の掌を右の掌で支える形で受け、右手で口に運ぶ形で行われる。以前行われていた口を少し開いて舌の上に拝領する人もごく少数いる。（また）聖体拝領のたびごとに、ゆるしの秘跡を受けなければならないと考えている信者がいるが、大きな罪（大罪）がある場合はゆるしの秘跡を必要とするが、それ以外の場合はその必要はない。このような考え方は、数十年前くらいまで広まっていた秘跡に対する、狭く、厳しい態度の名残である。（聖パウロ女子修道会＝女子パウロ会＝公式サイトから）なお、洗礼の相互承認＝フルコミュニオンを行っている宗派（正教会、東方典礼カトリック教会等）に於いては秘跡を受けることが可能です。</p>
19	質問	<p>奉納の時の会衆の起立・着席についての質問です。所属教会では以前は奉納の品を司祭に手渡すまで会衆は起立のまま奉納の歌を歌い、奉納者が戻る時に着席するという習慣がありました。コロナ収束後奉納を再開しましたが、起立している人、着席している人、バラバラです。式次第には、「感謝の典礼に入るときは『座る』」と書いてありますので、会衆は共同祈願後すぐに着席してよいのでしょうか？</p>
	説明	<p>共同祈願が終わったらすぐに着席してください。奉納行列は奉納者のみが行い、むしろその他の会衆は</p>

		奉納の歌を歌うこととミサ献金をささげることとに専念しましょう。
20	質問	ミサの中で使われる香炉を振る回数、カンパヌラを鳴らす回数・鳴らし方について個人や小教区ごとに様々な違いがあると感じる。小教区ごとの伝統などで統一することは難しいでしょうが、侍者・奉仕者を養成するため、正式な所作を学ぶ機会があれば良いと思う。
	説明	「新しい『ローマ・ミサ典礼書の総則』に基づく変更箇所」(2015年11月29日からの実施:カトリック中央協議会発行)には、「以下に対しては香炉を3回振って献香する。すなわち、聖体、表敬のために公開された聖なる十字架の遺物と主の像、ミサのいけにえのためのささげもの、祭壇、十字架、朗読福音書、復活のろうそく、司祭と会衆。」とあります。(香炉は2振りです) 小鐘=こがね(カンパヌラ campanula)の鳴らし方、回数についての規定はありません。「ローマ・ミサ典礼書の総則150」には「聖別の少し前に、 適当であれば 、奉仕者はカンパヌラ(小鐘)を鳴らして信者の注意を喚起する。同じく 地方の習慣 に従って、それぞれ、ホスティアとカリスが会衆に示されたときにカンパヌラ(小鐘)をならす。」とあります。
21	質問	主日ミサの聖体拝領は一日に何回まで受けられるのでしょうか。一回だけという方と、二回までという方がいます。
	説明	すでに、ミサに参加し、聖体を拝領している人でも、同じ日に参加した、別のミサに限って聖体を拝領することができます。これは、たとえば、当日の典礼で決められたミサ典礼に参加した信者が、葬儀ミサに参加した場合、教会50周年の祝賀ミサに参加した場合、司祭の叙階式ミサに参加した場合などのことを指しています。
22	質問	朗読の時の「礼」について、所属教会では祭壇中央、祭壇に上がる前、朗読台でと三回の礼をしますが、このままでよいのか二回でよいのか、それとも祭壇中央のみの礼でよいでしょうか?
	説明	ハッキリとした規定はありません。 「ともにささげるミサ」には「朗読者は朗読の終わりを示すため『神のみことば』と唱える。」「続いて、朗読者は聖書に一礼して席に戻る。」との説明があります。 参考までに名古屋教区の南山教会では次のようにしています。朗読奉仕者は以下の場面でお辞儀をする。「内陣に上がった時に祭壇の前で祭壇に、またその奥の聖櫃のイエス様に向かって。」「朗読を開始する前に、御言葉に対する表敬のため聖書(聖書と典礼)に向かって。」「朗読を終えて『神のみことば』と宣言した後、聖書に向かって。」「内陣から退出する前に祭壇の前で侍者、司祭とそろって。」
23	質問	ミサそれぞれの構成要素の持つ意味合いについて教えて下さい。 a 「パンをさく場面の重要さの意味」、 b 「使徒信条や回心の時の頭下げる行為の意味」、 c 「聖体奉挙時の礼のタイミングや鈴の合図の出し方」
	説明	a. 「パンを裂く」 最後の晩餐でキリストが行われたパンを裂く動作は、使徒時代には感謝の祭儀全体の名称となり、大勢の信者が、一つのいのちのパン—それは世の救いのために死んで復活したキリストである—にともに与ることによって、一つのからだとなることを意味しています。 「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」(一コリント10-17) b-1. 「回心の祈り」 私たちは、私たちがしたすべての悪いこと、あるいはすべきであったのにしなかった正しいことに対

		<p>して責任を取らなければならないのです。したがって私たちは回心の祈りにおいて、心からの痛悔を表し、私の過ちによって、私の大いなる過ちによって罪を犯したことを謙虚に明確に認め、真の悔い改めでの告白となるように祈ります。ですから、この式文を習慣的に口先だけで「唱える」のではなく、心から、手を合わせて頭を下げる身体的な動作をも伴って神と人々に罪からの解放を嘆願します。</p> <p>b-2. 「使徒信条」</p> <p>主日又は祭日のミサでは信仰宣言が行われます。信仰宣言は主にニケア・コンスタンチノーブル信条ないし使徒信条が用いられます。この信条は、キリスト教信仰の規準ないし規範として初代教会で用いられていた信仰告白の要約です。</p> <p>神の御子は、おとめマリアから生まれただけではなく、実際に人間の肉をとったのです。このことはキリストの受肉の神秘が、私たちの現実全てに浸透していることを意味しています。つまり受肉の神秘は、私たちは皆、無条件で、無償で御父からの大切なものとされていること、愛されていることの証なのです。どのような人間的な地位や名声、職業や身分とも全く関係なく、神は私たちの全てとなつて下さったのです。私たちはこのような方への信頼を告白するのです。それゆえ典礼書は、「聖霊によって処女マリアよりからだを受け人となられました」と唱える際に、お辞儀をするよう求めています。</p> <p>c-1. 「礼のタイミング」</p> <p>「ともにささげるミサ」にあるとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・司祭がホスティアを示した後、会衆は司祭とともに手を合わせて深く礼をする。 ・司祭がカリスを示した後、会衆は司祭とともに手を合わせて深く礼をする。 <p>c-2. 「鈴の合図」</p> <p>小鐘＝こがね（カンパヌラ <i>campanula</i>）の鳴らし方、回数についての規定はありません。「ローマ・ミサ典礼書の総則 150」には「聖別の少し前に、適当であれば、奉仕者はカンパヌラ（小鐘）を鳴らして信者の注意を喚起する。同じく地方の習慣に従って、それぞれ、ホスティアとカリスが会衆に示されたときにカンパヌラ（小鐘）をならす。」とあります。（質問説明№17も参照）</p>
24	質問	当小教区は子どもや若者がいなく、侍者が就けない状況ですが聖変化の鈴は、信徒が信徒席で鳴らしても良いでしょうか？
	説明	小鐘を鳴らす目的は注意喚起ですので、無理に鳴らす必要はありません。共同体として鳴らした方が良くいとされる場合は、信徒席から先唱者が鳴らされても良いと思いますが、主任司祭に相談して下さい。
25	質問	ベールの意味は？なぜしなくなったのでしょうか？ 女性のベールはつけていない方も多のですが、以前ベールを持たずに子どもがミサに与っていると、シスターがベールを貸して下さったことがありました。
	説明	初代教会の時代には、洗礼を受け、罪をゆるされ、神の子となったということ、目に見える形で示すものとして、「白衣（びやくえ）」に着替えていました。この白衣を1週間着て、復活節第2主日のミサ後、白衣を取るようになっていました（白衣の主日）。これが、時代を経るにしたがって、今のようなベールと白い布になったのです。また、女性は、髪の毛をきれいに飾り、華やかだったので、白衣の主日の後も、神のみ前に出るときは心の姿勢だけではなく、頭につけた飾りもベールをかぶって慎み深くしました。現在では、頭髮にそれほどはでな飾りをつけるということもなくなり、ベールをかぶる習慣も少なくなりました。
26	質問	小冊子「ともにささげるミサ」には、使徒信条「主は聖霊によって宿り、おとめマリアから生まれ」までの間「一同は礼をする」とあります。一方、以前に礼をするように教えられていた栄光の賛歌の「主なる御ひとり子イエス・キリストよ」の所には「礼をする」との記載がありません。どのような理由で変更

		されたのか？
	説明	<p>使徒信条は、元々は洗礼志願者が洗礼式で告白する式文の一部でした。使徒信条の一言一句には非聖書的文言が含まれていますが、聖書に由来し要約しているので典礼に入っています。礼のしかたには、頭を深く下げる場合と少し下げる場合の2種類があります。少し頭を下げる礼としては、父と子と聖霊の名が同時に唱えられるときや、イエス、マリア、そのミサで祝う聖人の名前に対してなされます。また日本では、回心の祈りのときにも手を合わせて少し頭を下げる適応を採用しています。</p> <p>(p.33、梅村昌弘、カトリック中央協議会、『感謝の祭儀を祝う 新しい「ミサ式次第」解説』)</p>

集会祭儀・祈り・連絡・聖具に関する質問

27	質問	言葉の典礼による集会祭儀（聖体拝領あり）における「主の祈り」を歌ってよいか
	説明	集会祭儀の主の祈りを歌ってもいいです。
28	質問	古くなって破損したロザリオやマリア像どのように扱えば良いのでしょうか？
	説明	<p>ゴミとして処分しても差し支えありません。ただし、他の用途に使われるのを避けるためにも、形が目立たないようにし、外から見えないようにして捨てるなどの配慮をした方がいいでしょう。信心用具や聖画像、さらには聖書などの霊的書物や冊子などは、そのもの自体が礼拝の対象ではなく、あくまでそれらの道具を介して神を礼拝するものですから、ゴミとして処分してもなんら差し支えはありません。例えば、壊れたロザリオを捨てたとしても、その中に神の霊が入っていたわけでも、聖母マリアの魂が入っていたわけでもありません。もちろん信仰を捨てたわけでもありませんから、信仰的には何も問題になることはないのです。でも、折れて使えなくなった針に対してさえ、感謝して「針供養」をする日本においては、ゴミと一緒に捨てるのは情動的に抵抗を感じる方も多いことと思います。それからまた他の用途に使われたりするのも避けたいということもあるでしょう。ですから、処分に際しては外から見えないようにして工夫して捨てるとか、形があまり目立たない程度に分解して埋めるなどの配慮をすればよいと思います。教会や教会関係の施設を建設する際に、その土台部分に埋めたりすることもあるようです。</p>
29	質問	コロナ禍の影響で聖堂に聖水を置いていませんが、本州の教会では聖水を置き始めたと聞きました。どのような判断基準があるのでしょうか。また設置する際はどのような注意が必要でしょうか。
	説明	各司教区の司教様が決められます。札幌司教区では2022年1月の司教文書で、感染防止対策の原則終了が示され、個々の小教区対応は主任司祭の判断に権限移譲されています。
30	質問	ミサ時において派遣の祝福前に教会からのお知らせを行っております。このお知らせの内容についてですが、お知らせするそれぞれの担当者は信徒には声で伝えるべきと捉え、細かい内容の案内をいたします。その中には、業務的な内容（掃除、忘れ物、教会管理等）があります。司祭が祭壇におられる中、違和感があります。この類は司祭退堂後ではないでしょうか？また、お知らせの所要時間も気になるところです。簡潔案内の工夫は必要ですが何か。
	説明	<p>小教区共同体の中で解決できます。そして、そのような努力が必要です。</p> <p>「ローマ・ミサ典礼書総則 90」に「閉祭には以下のことが含まれる。a.必要に応じて行われる短いお知らせ」とあります。また、『感謝の祭儀を祝う-新しい「ミサ式の式次第」解説-日本カトリック典礼委員会編 p.27-28』には「お知らせは閉祭の要素です。そのため、感謝の典礼に続いて拝領祈願の後に行われます。「ミサの雰囲気をつまみ無にする」「印刷して配るだけでいい」といった声を耳にすることもあります。ミサと生活を結ぶ機会であることを確認しておきたいと思います。」とあります。</p>
31	質問	以前、ミサ前に「朝の祈り」を皆で唱える習慣がありましたが、司祭の指示で止めて10年以上になり

		ます。コロナ禍の後、他都府県の教会を訪れると「朝の祈り」をしていましたので、札幌地区の他の教会ではどの様にしているかと気になります。「朝の祈り」をするかどうかは、誰？が又はどこで？決まるものなののでしょうか。教区のおさえをお聞きしたいです
	説明	朝の祈りだけではなく、昼、晩、寝る前の教会の祈り（新しい聖務日課）を信徒が唱えることは奨励されています。札幌地区では北一条教会が週日の朝7時のミサの前に共同で「朝の祈り」をしています。「朝の祈り」をしたい場合は各共同体でよく話し合っやるかやらないかを決めたらいいと思います。なお、ミサの開始時間とのバランスがありますので、主任司祭との打合せも必要です。
	質問	ミサで使用する楽器についての質問です。以前、ミサでギターを使用していましたが、改定後、ギターの使用は控えた方が良いとの意見がありました。ミサでギターを使用することに問題があるのかをお聞きしたいと思います。
32	説明	ミサにふさわしい他の楽器の使用も可能です。他教区のカテドラルなどではオーケストラが活躍することもあります。オルガン、特にパイプオルガンは、伝統的にヨーロッパの教会で重んじられてきました。しかし現代では、それぞれの国の伝統文化を尊重し、さまざまな可能性を試みることが許されています。なお、典礼憲章120条には「パイプオルガンは、その音色が教会の祭儀に驚くべき輝きを添え、心を神と天上へと強く高揚させる伝統的な楽器として、ラテン教会において大いに尊敬されなければならない。他の楽器は、それが聖なる用途に適しているか、あるいは適応させることができ、聖堂の品格に合致しており、真に信者の育成に役立つかぎり、地域の管轄権を有する権威者の判断と同意のもとに、典礼に取り入れることができる。」とあります。
	質問	集会司会者の子供への対応について、集会司会者が聖体拝領時に拝領者に祝福を与える事はできませんが、乳児・幼児へも分かりやすい祝福に替わる対応の仕方を教授願います。
33	説明	洗礼を受けていない人や初聖体前の子どもが並んでいる場合、聖体奉仕者は、祝福とともに祈ることができます。例えば、聖体容器を持っていない方の手を自分の胸にあて、軽く頭を下げつつ「キリストの祝福がありますように」と祈るとよいでしょう。
	質問	聖体拝領時、御聖体を司祭の前で口に入れず自席にもっていく人を見かける。その場で御聖体を頂くよう御ミサで指導ねがいたい。
34	説明	聖体を自席に持っていく方の大半は未信者の方と思われます。聖体拝領時の案内等で誤解が生じないような注意が必要です。カテドラルとか大聖堂でのミサの場合、聖体授与の司祭の横に信徒が立って「誤って未信者に聖体を授与しないよう」気を付けている教会もあります。

2024年9月23日典礼研修会後に寄せられた質問

	質問	ミサの動作、立つ、座る等を合わせる・・・日本人向けの指導でしょうか。多国籍の教会で動作を合わせることは困難なことの様に思います。聖体拝領も口で受けるか手で受けるかも曖昧です。 また、ベール着用が曖昧ですが、受洗者に対してどの様にお話をしたらよいのか。高額なベールが負担に感じる人もいます。
35	説明	ミサ中の動作については日本の司教団が決め、日本国内のミサで適用され、他国籍は関係ありません。2015年6月15日発行の「新しい『ローマ・ミサ典礼書総則』に基づく変更箇所—2015年11月29日（待降節第1主日）からの実施に向けて」（カトリック司教協議会著）には以下の記載があります。 動作・姿勢 ・司式者を含むすべての参加者の動作や姿勢が、ミサに祭儀全体の美しさや簡素さを大切にし、すべて

		<p>の人の行動的参加を促すものとなるよう考慮します。個人的な好みや自由裁量によって決めることは望ましくありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者一同が共通の姿勢を守ることによって、祭儀に集まったすべての人の一致がしるしとして表されます。 ・日本の適応として、ミサの中では立つことと座ることを基本的な姿勢とします。立つことが定められている場合でも、健康上の理由がある場合は座ることができます。 ・日本の適応として、パンとぶどう酒の聖別のとき、会衆はひざまずくのではなく立ったまま手を合わせます。そして、聖別の祈りの後、司祭・助祭とともに手を合わせて深く礼をします。 ・動作や姿勢について、司牧者は折にふれて説明する機会を設けるよう心がけます。 <p>また、2014年11月1日発行の「日本におけるミサ中の聖体拝領の方法に関する指針」（カトリック司教協議会著）には「拝領時の姿勢」について以下の記載があります。</p> <p>3 拝領者の姿勢については、信者は司教協議会の決定に従って、ひざまずくか立って拝領するとさだめられている。これに基づき、日本においては、ミサが行われる場所の事情、ならびに拝領者が特別な理由により立つことが出来ない場合を除いて、原則として立って拝領することとする。これは、一同が同じ姿勢で拝領することによって、ミサに集まった会衆の一致のしるしとして表すとともに、拝領のための行列が円滑に流れるようにするためである。しかしながら、ひざまずいて聖体を受けることを望む信者に対して、そのことだけを理由に聖体授与を拒むことは出来ない。</p> <p>11 聖体を手を受けることを望む拝領者は、～手を合わせて司祭の前に立つ。そして、片方の手のひらを上にし、その下にもう片方の手を添えて両手を差し出す。司祭は聖体を取り上げ、拝領者に示しながら、「キリストの御からだ」と言い、拝領者が「アーメン」と答えると、聖体を拝領者の手の上に置く。拝領者は次の拝領者のために脇に寄り、片方の手の指で聖体をうやうやしく取り上げ、片方の手を添えながら聖体を口に入れ、その場ですべてを拝領して席に戻る。</p> <p>12 聖体を口に受けることを望む拝領者は、～手を合わせて司祭の前に立つ。司祭は聖体を取り上げ、拝領者に示しながら、「キリストの御からだ」と言う、奉仕者が拝領者の口の下に添える拝領用の受け皿は、ホステアまたはそのかけらの一部が落下する危険を避けるために維持される。拝領者は「アーメン」と答えて聖体を口に受けると、次の拝領者のために脇に寄り、その場ですべてを拝領して席に戻る。</p> <p>ペールに関しては、№25の説明をお読みいただき、代父母が受洗者にその背景と現状（特に自小教区の現状）をご説明し、購入の判断を受洗者に委ねては如何でしょうか。</p>
36	<p>質問</p>	<p><オルガン担当です></p> <ul style="list-style-type: none"> ・平和の賛歌の歌い出しタイミングが取りづらいです。 司祭のパンの分割が見えず、聖体授与奉仕者が聖櫃からチボリウムを取り出すまで司祭は待機されているように見受けられます。（平和のあいさつの後）この間、間延びする感じがします。パンの分割が始まる前に（平和のあいさつ後）平和の賛歌を始めて良いですか？ ・復活徹夜祭の典礼順序（答唱詩編、栄光の賛歌など）が主日ミサと異なります。 理由、歴史的経緯等の説明をして頂けると記憶しやすいです。
	<p>説明</p>	<p>パンの分割前に平和の賛歌を始めても問題ありません。因みに、北一条教会では「平和のあいさつ」が終わり一呼吸おいてオルガン演奏を始めています。他の小教区からも同様の話を伺っています。なお、平和の賛歌は思った以上に長いので、司祭がパンを裂いている途中で終わるようなことはありません。</p>

		復活徹夜祭の典礼順序が主日ミサと異なるのは、ローマ・ミサ典礼書総則に「聖週間の『聖なる過越しの3日間』の中心を復活徹夜祭におき、復活の主日の『晩の祈り』で閉じる」と記されているように、復活徹夜祭がキリストの過ぎ越しを強く印象付ける特別の典礼だからと思われます。なお、歴史的経緯は時間的余裕ができてから調べます。昔、復活徹夜祭は日曜日の午前0時に始まり、朝まで徹夜して主の復活を祝う祭儀が行われてきました。ヨーロッパ、特にスペインでは今でも6時間にも及ぶミサを行う教会が多く残っていますが、日本では見かけなくなりました。
37	質問	ミサ式次第の改訂について、小教区信徒にどの様に伝えればよいのか、その方法が重要だと思います。典礼部員から全体に伝える機会を設けるのか、先唱者から伝えてもらうのがよいのか、悩みます。ただ、ここが肝心な部分だと思うのです。ひとり一人の信徒にまでおとすことが、これまでも不十分でしたから、この部分の確認を地区でも押さえていく必要があると思います。
	説明	小教区内の典礼方針共有は、原則として主任司祭、運営委員長、典礼部長の役割です。なお、重層性が強い小教区では方針徹底が容易ではないと思いますが、例えば層別に近隣小教区と連帯して情報提供するという方法も考えられます。
38	質問	<p>典礼が何点か変更になっていますが、(私たちの教会では) 以前の内容のまま実施していた。</p> <p>1) 「平和の賛歌」のあとの「世の罪を取り除く神の子羊・・・」が先唱から会衆に変更になっていたが、教会では以前のまま先唱者が最初の箇所を唱えている。</p> <p>2) 「回心の祈り 一」・・・司「全能の神と」会「兄弟姉妹の皆さんに告白します。...」この時、唱え始めから「アーメン」まで、手を合わせて頭を下げますが、下げていない人が多い。</p> <p>3) 侍者の鐘を鳴らす回数が4回ではなく6回鳴らしている。</p>
	説明	<p>「平和の賛歌」は以前の歌い方が間違いだったそうです。全員ですべてを歌うのが正しいと訂正されました。早く慣れるようにしてください。</p> <p>「回心の祈り」で日本版の「たびたび罪を犯しました」の箇所は、ラテン語規範版テキストでは「mea culpa, mea culpa, mea maxima culpa.」(私の過ちによって、私の過ちによって、私の大いなる過ちによって)と「私の過ち」が三度繰り返されているそうです。繰り返すことで、自分の罪を強調し、行いを深く反省し後悔するのですが、このようなきとき多くの方は自然と頭を下げると思います。</p> <p>カンパヌラはあくまでも注意喚起ですが、研修では「司祭が言葉を発しているときは鳴らさなように」との話がありましたのでお含み下さい。</p>

【 書籍紹介 】

「香部屋係のハンドブック ―主よ、どこに過越の準備を―」(2018年4月 教友社発行)

香部屋係のためのハンドブック。広島教区の白浜司教が福岡サンスルピス大神学院で典礼学を教えておられたとき「カトリック新聞」に連載した記事と、長年、香部屋係として奉仕してこられた信徒の齊藤賀壽子さんの体験メモが一つになった書籍。

「シンボルで味わう典礼、礼拝」(2024年4月再販 宮越利光著 日本基督教団出版局発行)

多くのシンボルで彩られている典礼の所作、司式者の服装、典礼職などの由来と変遷、現在の持ち入れられ方が紹介されている。一つ一つのシンボルに込められた意味を味わうとき、日々の典礼・礼拝がさらに豊かになる

「感謝の祭儀を祝う 新しい『ミサの式次第』解説」(2023年8月 カトリック中央協議会)

新しい「ミサの式次第」実施準備のため「カトリック新聞」に連載された日本カトリック典礼委員会委員による変更箇所についての解説に適宜修正や加筆を施し、より深い理解のためのテキストとして再構成。

「典礼奉仕への招き―ミサ・集会祭儀での役割-第2版-」(2016年5月 オリエンズ宗教研究所発行)

すべての信者が招かれている典礼奉仕の役割を理解し、実践するためのポイントをまとめました。祭壇奉仕や聖体奉仕ばかりでなく、障害をもつ方や高齢者、外国籍の信者の方とともに典礼をささげる場合、子どもの信仰教育とミサとの結びつき、「司祭不在のときの主日の集会祭儀」などについてもわかりやすく解説。

「朗読聖書の緒言」(1998年6月 カトリック中央協議会発行)

教皇庁秘跡典礼聖省が1981年に発表した、「ミサの朗読配分」第2版の緒言。ミサの聖書朗読の意義や構造を理解し、その豊かさを味わうための参考書として、朗読奉仕にあたるすべての人にとって必読の書。

「ミサがわかる 仕え合う喜び」(2015年4月第8刷 オリエンズ宗教研究所発行)

ミサ典礼を行う際に、祭壇奉仕者が理解しておくべき内容(役割・実践)を、豊富な図でやさしく説明されていて、典礼に直接かかわる奉仕者や、新たに典礼委員になった信徒の参考書

「教会歴と聖書朗読」(毎年10月 カトリック中央協議会発行)

日本の教会のために毎年10月に編集・発行されている典礼暦。1年間の典礼日の種類や祭服などの色、ミサの聖書朗読箇所や答唱詩編・アレルヤ唱の『典礼聖歌』の番号、祈願の『ミサ典礼書』のページ番号、叙唱の『ミサの式次第』のページ番号などが掲載されている。また、聖歌を選ぶ基準やヒントを記した「ミサの聖歌を選ぶために」「典礼聖歌による聖歌案」も収録。

「典礼暦年と典礼 暦に関する一般原則」(2004年9月 カトリック中央協議会発行)

以前に発行された『ミサ典礼書の総則と典礼暦年の一般原則』の「典礼暦年の一般原則」部分を独立させて編集したもの。従来の訳から大きな変更はないが、「一般ローマ暦」にはその後に追加された新しい記念日が付け加えられている。神学教育、信徒の奉仕者の養成、典礼の勉強会などに活用できる。

「ミサの式次第」（2022年11月 カトリック中央協議会発行）

2022年11月27日（待降節第一主日）から実施される新しい式文によるミサのための司式者用の儀式書。巻頭には「ローマ・ミサ典礼書の総則」が収録されている。「ミサの式次第と第一～第四奉献文」「ミサの結びの祝福と会衆のための祈願」「水の祝福と灌水」に加え、現行『ミサ典礼書』の叙唱と「ゆるしの奉献文」を収録。

「キリストの神秘を祝う 典礼暦年の霊性と信心」（2015年6月発行 日本カトリック典礼委員会編）

「典礼暦年の霊性と司牧」（2009年）、および「典礼暦年と信心」（2010年）のテーマで開催された全国典礼担当者会議での講演の記録。『典礼憲章』の精神に基づいて刷新された典礼暦年の霊性と、典礼との結びつきを忘れず適切に執行されることで信仰生活を豊かにする信心について学ぶための格好のテキスト。

「教会の祈りの総則」（2023/6 日本カトリック典礼委員会翻訳・編集）

現行の『教会の祈り—新しい聖務日課』に収められている総則に対し、大幅な修正は施さずとも、公会議公文書の引用を改訂公式訳に、聖書の引用を新共同訳に差し替え、規範版第2版に基づく修正を反映し、用字や表現等の一部改めたもの。

以上